

深く沈み、なかなか浮いてこなくても息をしっかりと吸える子は、50m泳いでしまうのだった。これは全く驚きであった。呼吸をしつかり教えることの大切さがよく分かった。何せ4年生が400mも泳ぎ、もつと泳げるなんていうんだから。これはもう私が泳げないのはドル平のせいではなく、泳ぎ方が悪いんだということになってくる。練習するしかない。ようやくリラクゼーションが十分取れていないで、息の吸い方が不十分なせいだと分かってきた。ちゃんと学ばないものを言うのはとってもし怖いことである。

(2) マット運動との出会い

系統性の正しさと実践性に本当に感激したのは、夏大会のマット運動分科会に参加した時であった。堀江先生がその時の提案者であった。その時までの私のマット運動の指導はと言うと、前回は首を入れて背骨一つ一つをゆっくりつけるようにして足を伸ばして回るというように指導して、体の線の一つ一つに神経の行き届いたすばらしい前回りなどと一人悦に入っていたものであった。しかし教える技は前回り、後ろ回り、三点倒立ぐら

うやることはなかった。そこでマット運動の指導はおしまい。次の単元に移るといような具合であった。

分科会の提案は驚くことばかりであった。「マット運動の基礎技術はジャンプを含む側転です」エツ、基礎技術って何だ。マット運動に基礎技術なんてあるのか。前回りのような体を丸めて回るロール系の小さな回転感覚は側転の中に含まれる。連続技が大事で単一技はその構成要素で前回りにも色々な種類があるんだから、連続技の中で使いこなせるようにならなければ、本当にできるようになったとはいえない。全く初めて聞くことばかりで驚きの連続であった。

その時の練習順序は、まず首振り歩きをやり、動物歩きで逆さ感覚や手足の協応動作の感覚を培い、側転につなげるというものであった。3種目連続でつなぎや、リズムの変化を研究させ、お話しマット（お話しに合わせて連続技を演技する）で子どもの自主性や、表現意欲を引き出そうとするものであった。

そうか。国語や算数と同じに体育でも何のために教えるかとか、子どもはどういう反応を示すとか、やっぱり教材研究が必要なんだ。なんて当たり前のことに気づいたりして。もう学校に帰って試してみたくてたまらなくな

なった。

学校に帰って2学期、今度は教える中身がいつぱいあった。早速側転である。そのころ側転なんて教えている人は誰もいなかった。子どもたちはのって、あつという間にできるようになりトイレに行くにも側転で行く始末。私が望んでいた、子どもが自主的に取り組む授業が実現してしまったのだ。

それに今度は教える中身が無限にあるのだった。3種目連続だつて側転・前回り・V字バランス、の組み合わせを変えてだけで9通り、前回りを2回使ってもいいことにすれば前回り・側転・前回りと言うように、また連続技の数が増えていく。なんとたった三つの単一技しか知らなくても連続技は無限に作れることになる。子どもたちが追求する中身が増えるのだ。

これまで教えることがないなんて悩んでいたのがうそみたいだった。もう嬉しくって体育はマット運動だけやっていて。子どもたちは先生が教え方を知らないにもかかわらず、ハンドスプリングまで練習し、3人完全にできるようになってしまった。

「これは僕たちの宝だね。先生、ほかの人たちには教えないでね。」と言って進級していった。

最後に

荒木先生を初め、諸先輩が長年にわたり実践し、研究を積み重ねてこられた系統性研究に対して、心から敬意をはらいたいと思っている。

ドル平の誕生にしても、重いテープレコーダーをかつぎ、浦和の小学校に通い、子どもを指導する中で生まれたということ聞いた。吐いて吸うという呼吸の有用性を実践の中で確かめ、さらにその科学的根拠を求めて大学の研究室を訪ね、実証していくというような、執拗な追究が行われたそうである。

私たちは子どものできないという事実を子どものせいにはせず、あくまで教師のせいとして背負い、指導方法を工夫し、今日できるようにならなくても、明日こそというように、楽天的に継続的に実践をみんなで積み重ね一つの方法を鵜呑みせず、みんなできくつもの例に当たって確かめて来たという実践的態度を受け継ぎたいと思う。